

日本における夢研究の展望補遺 (II)

古代におけるイメ (夢) の問題

名 島 潤 慈*

A Supplement to a Historical Perspective of Dream Research in Japan (II)

The Issue of Imē in ancient Japan

Junji NAJIMA

(Received October 3, 1994)

Nowadays Dream is called *yume* in Japan. But, in ancient Japan, it was called *imē*. *Imē* is divided into two parts, i. e., *i* and *mē*. *I* is a prefix, and *mē* is a noun. With regard to the origin of the word "*imē*", there has been many explanations; e. g., sleeping eye (寝目), eye in nighttime (夜目), holly eye (齋目) and so forth. Many authors and many early Japanese dictionaries have stressed sleeping eye as the meaning of *imē*. In the present paper, these explanations are examined. The results from this study suggest three points. First, of these explanations, holly eye (*imē*; 齋目) seems to be best valid. Second, *i* (齋) is also called *yu* (齋). Both *i* (齋) and *yu* (齋) are prefixes placed in front of nouns with religious connotations, generally indicating sacred, divine, pure, and clean quality of the noun. However, compared with *i*, *yu* has a strong meaning of purifying. Therefore, it seems that *yume* (齋目) means a purified eye. Third, *yume* (ゆめ) is also an adverb which means attention and caution. Written in *Kojiki*, Chinese characters for *yume* (ゆめ) are 湯目 and 由眼. Taking into account of the use of 目 and 眼, the concept of avoiding bad or vicious dreams seems to be included in *yume* as an adverb.

I 本稿のねらい

夢は世界各地においてさまざまな呼ばれ方をしている。アジア地域を例にとれば, mēng (北京語), muhung (広東語), k'um (朝鮮語), bei (門語), m-ōng (ベトナム語), ēpei (ラデ語), panaginip (タガログ語), auremen, aureman (ボナペ語, 庶民語), aliman (ボナペ語, 王族に用いる尊敬語), impi, mengimpi, mimpi (インドネシア語・マレーシア語・マレー語), impi (ジャワ語のンゴコ体), supena (ジャワ語のクロモ体), sapanaa (ネパール語), jēgūdū (モンゴル語), tolgin (満州文語), tusi (ウズベク語), xāb, sapanā (ウルドゥー語), sapna (ヒンディー語), sōp (カンボジア語), einme? (ビルマ語), svapna (サンスクリット語), spina (パーリー語), sihinaya, hīnaya (シンハラ語), fān (タイ語), rmi-lam (チベット語), dūṣ (トルコ語) な

ど。

その他, 南インドのドラビダ語族では, kaṇā, ka-ṇavu (タミル語), kināvu (マラヤラム語), kancn (コタ語), konof (トダ語), kana, kanasu, kanasa (カンナダ語), kanaci (コダグ語), kala (テルグ語・コラミ語) など。

日本における夢は, まずアイヌ語では tarap (八雲・幌別方言), wentarap (幌別・沙流方言), cinita (八雲・帯広・美幌・旭川・名寄方言), takar (幌別・名寄方言) である。戦前の樺太島 (サハリン) では, tarah (服部編著, 1964) ないし tarax (知里, 1975) であった。[幌別方言の tarap は, 知里 (1975) によれば, 「示すもの (tara=示す, p=もの)」という意味であるが, 片山 (1993) は, tara を tar-a とし, tar-a の意味を「あらわにする」としている。語頭の tar は「立つ・踊る」で, 日本語の tatu (立・起・建) に対応する。同じく幌別方言の wentarap は, 悪夢 (wen=悪い, tarap=夢) が原義。wen は, 日本語の語素 waru (悪) や, ure-hu (憂・愁) と対応する

* 心理学科

(片山, 1993)。なお、アイヌ語を除けば、北海道では一般に、夢はユメである。例えば、『増補改訂版 北海道方言辞典』(石垣, 1991)には、「夢見悪い」を「ユメミワリー」(函館にて採集)と表現するのが記載されている。]

沖縄語(琉球語)(琉球方言)では夢は一般に、イミ(imi)ないしイミー(imii)である(国立国語研究所編, 1963: 仲宗根, 1983)。imiの前にある?は、声門閉鎖・破裂音(glottal stop)である。ただし、台湾に最も近い与那国方言では、夢はドゥミ(dumi)である(服部, 1968)。[古い時代の琉球語では、夢はイメである。例えば、12世紀頃から17世紀初頭にわたって琉球の島々で語られたオモロを採録してある『おもろさうし』(外間・西郷校注, 1972)には、「いめ」とある。母音のeがiに変化するの琉球方言圏のほとんどの地域に共通した現象なので、琉球では『おもろさうし』以後、夢はイメからイミに変化したものと思える。しかし、このイミがなぜ与那国方言ではドゥミになるのかよく分からない。本永(1994)によれば、与那国方言では、本土方言のj(ヤ行の子音)がdに変化する。例えば、本土方言のju(湯)とjama(山)は琉球方言の代表である首里方言ではjuとjamaであるが、与那国方言になると、juはduに、jamaはdamaに変化する。同様に、本土方言の読むはdumuN、病むはdamuN、夜はduru、役人はdukuniNといった形に変化する(国立国語研究所編, 1963: 日本放送協会編, 1972)。イミもこういった関連でドゥミとなったものなのか。それとも、平安時代以後の本土方言のユメが、与那国島においては、ユガドゥへ、メがミへと変化して取り入れられてドゥミとなったものなのか。もっとも、日本の本土方言と琉球方言が分岐したのは奈良時代以前とみなされているので、後者の方の可能性は薄いように思えるが。]

ところで、本土方言では、夢はもちろんユメである。ただし、ユメは東京語を中心とするいわゆる標準語の呼び方で、地方によっては訛ってくる。例えば、『日本国語大辞典』第20巻(日本大辞典刊行会編, 1976)によれば、イメ(岩手・富山県・富山礪波・福井・福井大飯・志摩・伊賀・大阪・淡路・鳥取・周防大島・福岡・島原方言)、エミ(岩手)、エメ(新潟頸城・福井・鳥取・島根)、ユミ(岩手・山形・伊賀)、ヨミ(津軽語彙・秋田)、ヨメ(秋田・山形)などがある。[これらのうち、イメは訛りというよりもむしろ、夢の古語のイメがそのまま残っているものと思われる(丸山, 1967)。なお、『全国方

現辞典』(東條編, 1951)によれば、「夢程(ほんの少しの意)」の表現として「イメホド」(岐阜県養老郡)ならびに「インメー」(山梨県)の二つが記載されている。また、宮崎県には夢をイメと呼ぶ地方がある(岩本, 1983)。]

日本の古代においては夢は、奈良時代頃まではイメ(imé)と呼ばれていた。例えば、『万葉集』ではイメは夢の他、伊目・伊米・伊味と表記されている。この目・米・味は、万葉仮名の乙類である(橋本, 1937)。[古代における夢の表記については、表1を参照。表1にあるように、夢が「ゆめ」と平仮名で表記されるようになったのは、904年頃に作られたと思える『伊勢物語』からであろう。]

このイメの意味について言えば、通常は寢目(寐目)とみなされている。試みに、手近の辞書を繙いてみると、『岩波古語辞典』(大野・佐竹・前田編, 1974)には、イメは「イは寢。メは目。眠っていて見るものの意」とあり、『新明解古語辞典』第2版(金田一監修, 1977)には、「『寢(い)目』で、眠っている間に見える像の意」、『古語大辞典』(中田・和田・北原編, 1983)には、「語源は『寢(い)目』という。『ゆめ』の古形」、『時代別国語大辞典 上代編』(上代語辞典編集委員会編, 1967)には、「上代では必ずイメという形で現れ、ユメという形はなかった。語源について、忌ムと関係づける説もあるが、やはり寐=目と考えるべきであろう」、『上代語辞典』(丸山, 1967)には、「『寢目(いめ)』の義。また、『寢見(いみえ)』の約ともいう」、『新編大言海』(大槻, 1982)には、「ゆめ」の項に「寢目(イメ)、又ハ、寢見(イミ)ノ轉ト云フ」、『新版 旺文社古語辞典』(松村・今泉・守随編, 1981)には「ゆめ」の項に、「寢目(いめ)の転」とある。

その他、辞書以外では、西郷(1972)は、「ユメは古くはイメで、イメは寢目すなわち睡眠中の目ということであると述べている。石橋(1907)は、「夢は邦語古くは『いめ』といひ、『寢目』又『寢見』の義となす」とし、大久保(1972)も「『寐目』を語源とする」としている。

このようにみえてくると、ユメの古形のイメは、もっぱら、寢(寐)目であるとされている。しかし、もともと『万葉集』には寢目という表記はない。『万葉集』におけるイメの表記は、夢・伊目・伊米・伊味の四つである。[『古事記』『日本書紀』では、すべて「夢」という漢字が使われている。表1を参照。]しかもまた、後述するように、夢の原義を寢目とすることに對して、いくつか他の説も提出されている。

表1 古代における夢の表記

制作年	作品名	作者（撰者）	夢の表記
712	古事記（古訓本）	太安萬侶	夢
720	日本書記（卜部兼方・兼右筆本）	舎人親王	夢
733	出雲風土記	出雲広嶋監修 神宅全太理撰	夢
733頃？	肥前国風土記	編者不詳	夢
751	懷風藻	撰者不詳	夢
759以後	万葉集（西本願寺本） 万葉集（寛永版）	大伴家持撰？	夢・伊目・伊米・伊味 夢・伊目・伊米・伊味
奈良時代？	龍田風神祭（『延喜式』（927）巻8所収）	作者不詳	夢
822？	日本靈異記（来迎院本）	景戒撰述	夢
894	句題和歌	大江千里	夢
904頃？	伊勢物語（伝一条兼良筆本）	作者不詳	ゆめ
905	古今和歌集（建久2年俊成本） 古今和歌集（嘉禄本）	紀貫之ら撰	ゆめ ゆめ・夢
906	日本紀竟宴和歌	撰者不詳	伊米
951頃	大和物語（永青文庫本）	作者不詳	夢
954-974	蜻蛉日記（宮内庁書陵部蔵）	藤原道綱母	夢
972-974頃	義孝集（繪原本）	藤原義孝	ゆめ
1004頃	和泉式部日記（三条西家本）	和泉式部	ゆめ・夢
1029-1033頃？	栄花物語（梅沢本）	赤染衛門？	ゆめ・夢
1086前後？	大鏡（東松本）	作者不詳	ゆめ
1107-1108	讃岐典侍日記（神宮文庫蔵村井敬義奉納本）	藤原長子	夢
1168-1211	健寿御前日記（金澤文庫本）	藤原俊成女	ゆめ・夢

筆者はこれまで二度にわたって日本における夢研究の展望を行ったが（名島，1993，1994），本稿では，上記の寝目も含めて，イメに関するこれまでの諸見解を整理し，筆者なりの吟味を行いたい。

II イメに関する諸見解

1 イメ・イミ・イミエ

さまざまな辞書の中で，夢の意味についての解説が最も詳しいのは『日本国語大辞典』（日本大辞典刊行会編）であろう。この辞書の第2巻（1973）と第20巻（1976）には，それぞれ「いめ」と「ゆめ」の項目で，従来の説を出典名と共に列挙してある。両項目からイメの意味を整理すると，(1)イメ（寝目）[万葉代匠記・和字正濫鈔・大言海・日本語源＝賀茂

百樹]，(2)イミ（寝見）[万葉代匠記・言元梯・国語の語根とその分類＝大島正健・大言海・和訓栞]，(3)イミエ（寝見）の約[大言海]，(4)イネミ（寝見）の義[日本釈名・名言通]，(5)ユメの転[日本語原考＝与謝野寛]，(6)ヨメ（夜目）の転呼[日本語大辞典＝松岡静雄]などである。これらのうち，与謝野による(5)の「ユメの転」とする説は，万葉集における夢の表記からみて受入れがたいように思える。

このように見てくると，イ（寝）の系列はイメ・イミ・イミエ・イネミなどさまざまなものがある。イ（寝）は，古語でいう安寝（安眠）（ヤスイ）・熟寝（熟睡）（ウマイ）・朝寝（アサイ）などのイであるが，意味的には，目を閉じて寝入ること，つまり眠りを指す。[イ（寝）は，『万葉集』ではさまざま

に表記されている。例えば、短歌1484では、「寐乃不所宿（寢 [い] の寢 [ね] らえぬに」、長歌1787では、「五十母不宿二（寢 [い] も寢 [ね] ずに）」など。]

2 ヨメ

上述の『日本国語大辞典』に引用されていた松岡(1937)は、イメ(夢)をヨメ(夜目)の転呼とみなし、「夜間即ち就眠中物を見るといふ意でヨメといひ、轉じてイメ又はユメとも稱へるのである。ヨメに對するアサメはサメともいひ、覚醒を意味する」と述べている。ただし、この「夜目」に対して丸山(1967)は、「『夜目』の転ではない」と主張している。理由は特に明記されていない。

夜目は文字通り、夜、暗い中で物を見ることや、物を見る目を指す。出典としては、『万葉集』の1845「鶯之 春成良思 春日山 霞棚引 夜目見侶」(鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども)(高木・五味・大野校注、1960)や、古代の祝詞の「大殿祭(おほとほのほかひ)」の「御床都比能佐夜伎、夜女能伊須須伎、伊豆都志伎事無久」(御床つひのさやき、夜目のいすすき、いづつしき事なく)(倉野・武田校注、1958)などがある。どちらの場合でも夜目は、夜間において見る目のことを意味しており、睡眠中の目ではない。したがって、睡眠中物を見るという意味であるとする松岡の説は疑問となろう。また、ヨメの転としてのイメというのも受入れがたいように思える。

3 ユミ

『日本国語大辞典』には引用されていないが、『時代別国語大辞典 上代編』には、ユミをイメの東国語形とする説が紹介してある。また、『上代語辞典』にも、「ゆみ」の項に、「ゆみ [夢] 『いめ』の東国方言。ゆめ」とある。そして、どちらの辞典も用例として、『万葉集』第20巻の4394の歌をひいている。[どちらの辞典も4393としているが、数え方に問題があり、ここでは、岩波書店の日本古典文学大系7の『万葉集』の数え方に従って4394としておく。]

この4394の歌は、「於保伎美能 美己等加之古美由美乃美仁 佐尼加和多良牟 奈賀氣己乃用乎(おほきみの みことかしこみ ゆみのみに さねかわたらむ なかけこのよを)」というものである。つまり、「由美」をイメ(夢)の東(あずま)方言と解して、由美=夢とする訳である。[美(み)は万葉仮名の甲類。]結局、イメ→ユミとみる訳で、イがユと交

替し、メがミに交替している。由美を夢とした場合、この4394の歌は、「大君の命かしこみ夢の身にさ寝か渡らむ永けこの夜を」となる(『上代語辞典』)。言語学者のMiller(1971)も、「古代日本語 imē は日本語 yume 『ゆめ(夢)』を生み、非標準的あづま方言では、yumi 『ゆみ(夢)』としてもあらわれる」としている。ただし、このMillerにしても、上述の二つの辞典にしても、イメがユミとなる明確な根拠を示していない。

4394の歌は、『万葉集』によれば、相馬郡の大伴部子羊の作である。大伴部子羊がどういう人物であるかは不明。相馬郡は、茨城県北相馬郡か千葉県南相馬郡のどちらかであるが、いずれにしても東国である。はたしてユミがイメの東方言であるか否かについては判断がつかねる。先にも触れたように、岩手・山形・伊賀ではユミ(ユメの訛り)という呼び方が現存しているので(『日本国語大辞典』第20巻)、ユミをイメの東方言とみなす可能性は捨てきれない。しかしながら、仮にそうだとした場合、「夢の身」といった表現は『万葉集』にも、さらには『古事記』『日本書紀』にも見られないので、ユミを夢と直接結びつけるのは少し困難ではないかと思える。[『万葉集』巻14は東譚(歌)ばかりを集めたものである。巻14には合計230の歌が収録されているが、その中で夢が用いられているのは短歌3471番の1首のみ。夢の表記は「伊米」である。この歌が採録された国名は記されていない。東国といっても、信濃・遠江以東のきわめて広大な地域が含まれるので、この歌の伊米の表記は決定的な証拠とはならないが、それにしてもやはり、由美を夢とみなすのはむづかしいように思える。]

ちなみに、上述の4394の歌の中には校異がある。つまり、「由美乃美仁」の「美仁(みに)」は、『西本願寺本万葉集』では「美仁(みに)」となっているが、『元暦校本万葉集』ならびに『類聚古集』では「美他(みた)」となっている。そこで、「美他」とした場合には、「大君の命かしこみ弓の共(みた)さ寝か渡らむ長けこの夜を」となり、大意は、「大君の御命令を畏んで弓と一緒に永いこの夜を寝て旅することであろうか」となる。この場合、「美他」は、「～のままに」「～とともに」の意の「むた」の転とみる訳であり(『時代別国語大辞典 上代篇』)、由美=弓とする。平安時代の『倭名類聚鈔』巻13(正宗編纂、1954)にも、弓は「由美」とある。なお、『日本古典文学大系7 万葉集』4(高木・五味・大野校注、1962)、『新訂 新訓 万葉集』下巻(佐々木、

1955)、『古典日本文学全集3 万葉集』下(村木, 1962)ではすべて、「美他」とし、したがって、「弓の共」と訳している。[異説として、『日本古語大辞典』には、「イメ(射目)」の項の後記に、「『イメ人』などといふ用例もあり、射部立てるといふ語も穩でないから、或はイメはユミ(弓)の轉呼ではないかとも思はれる」とある。]

4 impi

村山(1981)は、イメのイに「寝」を見ることは語源俗解に近いとみなし、その代わりに、「南島祖語 impi『夢』からの発達 immi>imi の mi が見(ミ)と異解釈され、同意味の目(メ)(=『見ること』)とおきかえられて、imi>ime という語形が生まれただろう」という説を提出している。impi は現在でも、インドネシア語や、ジャワ語のンゴコ体(ンゴコ語)などで夢として使われている言葉である(末永, 1991: Echols & Shadily, 1963: 石井, 1984)。この村山の説に従えば、イメのもとには南島祖語の impi であり、従って、イミそのものには何の意味もないことになる。

III 忌の問題

永藤(1973)は、「一説によれば『夢』は『い』『め』で『い』は『忌』、『め』は『目』であるという」「『夢』(忌目)は日常の次元を越えた聖なる経験に属する『見る』世界であった」と述べ、この忌目の説は『時代別国語大辞典』上代篇にある、と脚注している。しかし、『時代別国語大辞典』上代篇の「いめ」の項を見ると、「語源について、忌目と関係づける説もあるが、やはり寐=目と考えるべきであろう」となっており、この辞書が積極的に忌目としている訳ではない。

『古語大辞典』(中田・和田・北原, 1983)の方には永藤の言うように、「忌眼」という言葉が記されている。ただし、副詞としての忌眼である。具体的に引用すれば、「ゆめ [努・努力・勤] [副]」の項目に、「一説に『忌眼』で、物事を忌め慎んだ目で見ると求める意という」とある。忌は、イともユとも読まれるので、この辞典ではゆめ(忌眼)としてある。

「ゆめ」にはさまざまな意味があるが、大きく分ければ二つの意味がある。まず第1は、忌(い)み謹むことを指す。例えば、『古事記』には、「和賀都麻波由米(我が妻はゆめ)とあるが、意味は、「私の親しい妻は忌み謹んで清らかにしておれ」である(倉

野・武田校注, 1958)。第2は、強く注意を促すことを指す。例えば、『万葉集』1657の「散許須奈由米(散りこすなゆめ)は、意味的には「散ってくるな」である(高木・五味・大野校注, 1959)。

IV 齋の問題

これまでのところで、寝目、寝見、夜目の転、impi からの発達説などが唱えられていることが分かった。ここで少し視点を変えてみると、古代におけるイメは、(1)平安時代になるとユメと呼ばれるようになったこと、つまり、イがユに交代していること、(2)『古事記』や『日本書紀』に記されているように、イメはもっぱら神の啓示をうける媒介物であったこと、という二つの特徴がある。このような点からみて、イメのイを齋とする見方を検討してみたい。

齋目については、これまで何人かの提唱者がいる。例えば、中西(1975)は彼の論文の中で、「たとえば夢は齋目とも夜目ともいわれるが」云々と述べている。ただし、彼は、齋目の出典も、齋目とする理由も述べていない。

(副詞としての「ゆめ」ではあるが)齋目という漢字についての言及で最も古いのは、『日本書紀』巻第3、神武天皇の条についての注ではないかと思える。「基業(あまつひつぎ)の成否(ならむならじ)は、當(まさ)に汝を以て占はむ。努力、慎歎(ゆめ、ゆめ)」という天皇の言葉の最後の部分について、岩波書店発行の『日本書紀』上(坂本・家永・井上・大野校注, 1967)は、「ユメは、禁止の辞。ユは、もと、齋戒の意。メは、目。邪視することなく、齋戒した目を以て物を見よとの注意。転じて禁止の辞となった」と注記し、さらに、『日本書紀』下(坂本・家永・井上・大野校注, 1965)の補注のところで、「ユメは奈良時代から、相手に注意をうながす辞。普通、ユム(忌む)の命令形と見られているが、奈良時代の例ではメが乙類の仮名で書いてある。つまり、メの音は mē で、yumē の音だった。しかし忌メという命令形ならばメが甲類であるのが一般で、yume の音のはずである。従って、ユメという辞は忌メの命令形とは見られない。ユはユユシのユであり、齋忌のイに通じる。メは多分眼の意であろう。未開社会では邪視は物事に害を与えると信じられていたので、謹慎の意をこめて、物事を忌み謹んだ目を以て見ることを求めるために、齋眼!と言った。それが、そのまま、注意を求める語となり、平安時代には用法が限定されて、禁止にだけ使われるようになったものであろう」と述べられている。

ところで、この岩波版の『日本書紀』の注は、謹慎・禁止を意味する副詞「ゆめ」についてのものである。その点では、IIIで述べた忌眼と同じである。[齋と忌はもともと同根で、どちらも、イともユとも読まれる。] 結局のところ、IIIとIVのどちらも、齋と忌の読みの中の「ゆ」の方を取り上げて、副詞「ゆめ」の漢字としている訳であり、大変興味深い見解ではあるが、夢との直接の関連性については何も触れられていない。[『和句解』は、この副詞の「ゆめ」を、「ユメ(夢)と同源」としているとのことである(『日本国語大辞典』第2巻。)] もっとも、内容的には、「齋戒した目」「忌み謹んだ目」「齋眼」というのは、本章で問題としている夢(イメ)としての齋目にもそのまま適用できよう。

岩波版の注と比較すると、木村(1987)は、イメ(夢)の読みを直接「齋目」とみなし、「イメは、合理的な解釈では「寝目」かとされるが、ユメと音が交替すること、およびそれによって「神のさとし」を見るところからして、覚醒時の雑念をもたない「齋目(イメ)」とみる方が古代の感覚にかなうのではないか」「修行によって、ふつうの人よりも齋目の力にすぐれる代夢の法師は、その齋目に見た世界を覚めてから語る」と述べている。筆者個人としては、この見解に賛意を表したい。

V イとユの問題

言うまでもなく齋目という表記は存在しないが、しかし、この木村の見解は大変興味深い。ただ、木村の記述は大変短く、その主張を要約すれば、「覚醒時の雑念を持たない齋目」ということに尽きる。本章では以下、夢としての齋目を検討してみたい。

古代においては、イとユは交替可能である。意味的には、イもユも共に、神聖清浄な世界と関わっている。ただ、あえて区別すれば、ユはイよりも広い。つまり、ユは神聖清浄の世界のみでなく、超自然的な危険や不浄の領域にも関わっている。古代日本のイミについての岡田の詳細な研究を参照すれば、「イ」の方向は何よりも神聖清浄の世界と深くかかわり、イハフ・イツクにみられるように主として神聖を積極的に志向し、神聖の世界への転化や神聖な対象に憑依する態度や行為をも見いだすことができる。これに対してユの方向は、神聖清浄の世界をも含むが、広く超自然的な危険や不浄の領域にもかかわり畏怖や戒慎の感情や態度を強く指示しているとみてよい」「ユの系統語は神聖の領域を含め何よりも神秘的危険の世界を対象とした消極的な態度や情感を指標

とする点にその特性がある。いわゆる禁忌の場面にかかわるといえることができるであろう」「神聖冒瀆とかいわゆる不吉とされる行為や事象はユユシく、ユメとされるイムべき対象であり、逆に言えばイムべきことがユユシ・ユメの対象とされるであろう」(岡田, 1982)。[文中、ユメとあるのは副詞。]

このような点からすれば、漢字の齋目をイメとユメに分けてみるのが可能かも知れない。つまり、イメの方の齋目は神からのメッセージを受け取る神聖な目であり、一方、ユメの方の齋目は、(積極的には)ケガレを払って清めた目、(消極的には)不浄・禁忌を避ける目といった区別が可能かもしれない。[このような齋(ユ)の使い方は、例えば、平安時代の『蜻蛉日記』に見られるような齋屋(湯屋)の場合と類似していよう。齋屋とは文字通り、社寺に参籠する時、齋戒沐浴するための施設である。参籠は普通、本尊が安置してある本堂で行うので、信者は本堂に上がる前に齋屋で身を清める訳である。身を清めることは同時にまた、不浄を避けることでもある。]

なお、先にも触れたように、ユメは「波立つなユメ」といった具合に強い注意を促す副詞としても用いられる。このユメは、『万葉集』では、表意的には「勤」「謹」「忌」という字が使われ、字音表記としては「由米」の他、「湯目」「由眼」が使用されている(表2を参照)。メとしての目・眼の表記は、『古事記』『日本書紀』には見られない。[『万葉集』における湯目の使用例は、660「汝乎与吾乎 人曾離奈流 乞吾君 人之中言 聞起名湯目(汝をと吾を人そ離くなるいで吾君人の中言聞きこすなゆめ)。由眼の方は、2511「隠口乃 豊泊瀬道者 常滑乃 恐道曾 戀由眼(隠口の豊泊瀬道は常滑の恐き道そ戀ふらくはゆめ)である。前者は「人の中傷を聞かぬように」、後者は「恋心に気をつけるように」であり、いずれも相手に強い注意や戒心を求め、警戒を促している。]

このように、注意・警戒としてのユメの表記に目(眼)が使用されているのは、それなりの理由があるように思える。古代人の夢と言え、ともすれば『古事記』における神の教えの夢、『万葉集』における恋の夢ばかりが目されるが、しかし、古代人たちもこういった夢ばかりでなく、悪夢や凶夢を見たはずである。湯目・由眼の表記は、精神生活を不安なものとする悪夢や凶夢に対して注意・警戒を促すことが含まれていたように筆者には思える。なお、副詞としてのユメが明確な禁止を意味するようになったのは平安時代になってからのことであるが、その背

表2 古代における「ユメ」「ユメユメ」(副詞)の表記

出典	表記
古事記(古訓本)	由米(ユメ)
日本書記(卜部兼方・兼右筆本)	努力愼歎(ユメユメ)・努力努力(ユメユメ)・愼矣愼矣(ユメユメ)・愼(ユメ)・由梅(ユメ)
万葉集(西本願寺本)	由米(ユメ)・勤(ユメ)・謹(ユメ)・忌(ユメ)・湯目(ユメ)・由眼(ユメ)

景には、悪夢や凶夢を禁じ避けたいという明確な意志が働くようになったことがあるのではないだろうか。[この点に関しては、陰陽寮や陰陽師の影響が考えられる。]

以上の推測をまとめれば、もともとイメは齋目であり、それはもっぱら神からのさとしを見る神聖な目であった。時代的には奈良時代あたりまでであろう。しかしその後、平安時代あたりから、齋目はユメとなり、意味的には、けがれを払って清めた目となった。さらに、副詞としてのユメの変遷から見れば、平安時代以降、悪夢・凶夢を禁じ避ける目が強調された。けがれ(穢れ)とは、死・出産・月経など、触れるべきでない不浄とされた状態になることであるが(大野・佐竹・前田編, 1974)、語源的に見れば「気涸れ」で、生命力・霊力としての「ケ」が涸渇した状態を意味する言葉である(土橋, 1990)。悪夢・凶夢は古代人にとって、ケを枯渇させるものであったろう。

VI メの問題

メについてはイメとの関連でこれまでもふれてきたが、「目」ということであまり問題はないように思える。先にも述べたように、目は乙類である。この乙類の *mè* の *è* は中舌的な母音であり、いわば東北地方の人々が発音する *e* に近い音である。[乙類の *mè* (め) の表記は、推古期には米、「古事記」「万葉集」では、米・迷・昧・梅・涿・目・眼であり、「日本書紀」では、迷・妹・昧・毎・梅・目・眼である。今日、甲類・乙類として知られている発音上の区別は、平安時代に入ると消失した。したがって、*mè* は *me* となった。]

メは、複合語を作る時にはマナコのようにマ(*ma*)となるが、このメヤマは、既に服部(1957)や中本(1985)、安本(1987)が指摘しているように、アジア地域におけるさまざまな言葉とつながっている。例えば、*mok*(上古中国語)、*mata*(台湾ヤミ語、タガログ語、インドネシア語、タヒチ語、トンガ語、

サモア語、チャモロ語、モトウ語)、*mát*(ベトナム語)、*mata-na*(フィジー語)、*matsa*(台湾パイワン語)、*maka*(ハワイ語)、*mak, mi*(ネパール語)、*mai*(タイ語)、*met, meh*(中央インド語)、*mido*(ブータン語)、*mot*(モン語)、*mo, mik, mig*(チベット語)、*mogon*(ベンガリー語)、*mi, mii, mii*(琉球語)、*mata*(動物の目: ジャワ語の *ngoko* 体および *ngoko* 語)、*mripat*(人間の目: ジャワ語の *chromo* 体および *chromo* 語)、*mēgan*(ボド語)、*mōgan*(メク語)、*mu*(ラールグ語)、*mū*(ディマーサー語)、*maso*(マルガシ語)などである。

アイヌ語について言えば、目のアイヌ語は *sik* であって、メとは関係ない。ただし、アイヌ語には「覚める」「醒める」を意味する *mos, mós* がある。一方、アジアにおける「目覚める」を意味する言葉としては、フィリピンのルソン島のバリナオ語の *mimata*、ミクロネシアのチャモロ語の *makmata*、「目覚めている」はミクロネシアの中央カロリン語の *mmās* がある。前二者の言葉の中の *mata* は目であるが、後者の *mas* の一般的な意味は顔である。ただし、カロリン語には *schān en mas* (目の水=涙) という言葉もあるので、*mas* は目をも意味する。つまり、*mmās* は、*mamata* ないし *makmata* に遡る。このようにみえてくると、アイヌ語の *mos, mós* は、*mumas* → *mmos* → *mos* というプロセスで生まれたものであり、昔、アイヌ語にも目を表す *mata* が存在していたものと推定される(村山, 1993)。[アイヌ語には *nupe*(涙) という言葉がある。この *nupe* は *nu-pe*(目-水) である(片山, 1993)。同様に、*nukar*(見る)は、*nu-kar*(目-為す) である。アイヌ語と日本語との親近性からすると、古代日本には *m* 系の目だけでなく、*n* 系の目、例えば *na* といったものが存在していたかもしれない。また、*nu-* は、次に触れる朝鮮語の *nun* と関連しているようである。]

目・眼を意味する朝鮮語は *nun* である。*nun* は現代朝鮮語でも中世朝鮮語でも *nun* である。朝鮮語の語頭子音 *n-* は日本語の語頭子音 *m-* と対応するの

で、結局、nun は古代日本語の mē・ma (万葉表記の米・麻) と対応する (金, 1981)。長田 (1979) もまた、中世朝鮮語の nun は上代日本語の mē と対応し、日・朝共通基語形は nwa であると述べている。[nw は唇軟口蓋音である。ちなみに、日・朝共通基語の比定にあたって、中古朝鮮語の直接資料が存在しないため、長田は、中世後期 (1401-1500) の初期ハングル文献による朝鮮語を用いている。『竜飛御天歌』『訓民正音解例』『月印釈音譜』といった初期ハングル文献は、少なくとも中古後期 (901-1200) の朝鮮語と同質の言語である。]

目はこのように、アジアにおけるさまざまな言葉とつながり、同時にアジアの古層語ともつながっている。古代日本においても、伊目の他、利目 (斗米)・人目・目合など、目にまつわる用語が数多く使用されている (『古事記』『万葉集』)。さらに遡れば、土偶における目の強調 (邪を避ける辟邪の目) も見られる。目は、他者の世界、異なる世界、聖なる世界との主たる通路であった。

Ⅶ まとめ

ユメの古代語であるイメの意味としては、これまで、寝目、忌目、齋目、夜目の転などの説が提示されてきた。筆者はこれらの中で木村 (1987) が示唆する齋目が妥当ではないかと考え、本稿においては、他の諸説を検討すると同時に、齋目の問題を吟味してみた。吟味の結果を要約すれば、齋目はイメ (奈良時代まで) とユメ (平安時代以降) に分けられること、イメは神聖な目で、ユメはけがれ (不浄の状態) を払って清めた目であること、副詞としてのユメの表記から見ても、ユメはけがれ (気濁れ) を避ける目であること、これをより具体的に言えば、人間の生命力を減じさせる悪夢を避ける目であることなどが推測された。

引用文献

- 知里真志保 (1975) : 知里真志保著作集 別巻II 分類アイヌ語辞典 人間編 平凡社
- 土橋 寛 (1990) : 日本語に探る古代信仰 フェティシズムから神道まで 中公新書
- Echols, J. M. & Shadily, H. (1963) : An Indonesian-English Dictionary. Second Edition. Ithaca and London.
- 橋本進吉 (1937) : 古代國語の音韻に就いて 内務省主催第2回神職講習会講義 (橋本進吉, 1950, 橋本進吉博士著作集第4冊 國語音韻の研究, 岩波書店, 105-199)
- 服部四郎 (編著) (1964) : アイヌ語方言辞典 岩波書店
- 服部四郎 (1957) : 日本語の系統(3) - 音韻法則と語彙統計学的 “水深測量” - (服部四郎, 1959, 日本語の系統, 岩波書店, 153-239)
- 服部四郎 (1968) : 日本語の琉球方言について 文学, 36 : 1, 1-14
- 外間守善・西郷信綱 (校注) (1972) : 日本思想大系18 おもろさうし 岩波書店
- 石橋臥波 (1907) : 夢 歴史, 文学, 藝術及び習俗の上に現はれたる夢の學術的研究 寶文館
- 石垣福雄 (1991) : 増補改訂版 北海道方言辞典 北海道新聞社
- 石井和子 (1984) : ジャワ語の基礎 大学書林
- 岩本 実 (1983) : 宮崎県の方言 (飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編, 講座方言学9 九州地方の方言, 国書刊行会, 267-293)
- 上代語辞典編集委員会 (編) (1967) : 時代別国語大辞典 上代編 三省堂
- 金田一晴彦 (監修) (1977) : 新明解古語辞典 第2版 三省堂
- 片山龍峯 (1993) : 日本語とアイヌ語 すずさわ書店
- 金 思煒 (1981) : 改訂増補版 古代朝鮮語と日本語 六興出版
- 木村紀子 (1987) : 古代社会の声わご人たち - 夢語り・謡歌・猿楽をめぐる - 國語國文, 56 : 5, 22-41
- 国立國語研究所 (編) (1963) : 沖繩語辞典 大蔵省印刷局
- 倉野憲司・武田祐吉 (校注) (1958) : 日本古典文學大系1 古事記 祝詞 岩波書店
- 松岡静雄 (1937) : 日本語大辞典 刀江書院
- 松村 明・今泉忠義・守隨憲治 (編) (1981) : 新版 旺文社古語辞典 旺文社
- 丸山林平 (1967) : 上代語辞典 明治書院
- 正宗敦夫 (編纂) (1954) : 倭名類聚鈔 (源 順撰) 自11卷至20卷 風間書房
- Miller, A. (1971) : Japanese and the Other Altaic Languages. Chicago : University of Chicago Press. (西田龍雄監訳, 1981, 日本語とアルタイ諸語, 大修館書店)
- 本永守靖 (1994) : 琉球圏生活語の研究 春秋社
- 村木清一郎 (訳) (1962) : 古典日本文学全集3 万葉集 下筑摩書房
- 村山七郎 (1981) : 日本語の起源をめぐる論争 三一書房
- 村山七郎 (1993) : アイヌ語の研究 三一書房
- 仲宗根政善 (1983) : 沖繩今帰仁方言辞典 今帰仁方言の研究・語彙編 角川書店
- 中本正智 (1985) : 日本語の系譜 青土社
- 中西 進 (1975) : 見る - 古代的知覚 文学, 43 : 4, 123-133
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄 (編) (1983) : 古語大辞典 小学館
- 永藤 靖 (1973) : 記紀・万葉における「見る」ことについて 文学, 41 : 6, 14-29
- 名島潤慈 (1993) : 日本における夢研究の展望 歴史と研究領域の概観 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第42号, 283-324

- 名島潤慈 (1994): 日本における夢研究の展望補遺 (I) 古代から近世における夢の言葉 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第43号, 269-291
- 日本放送協会 (編) (1972): 全国方言資料第11巻 琉球編II 日本放送出版協会
- 日本国語大辞典刊行会 (編) (1973): 日本国語大辞典 第2巻 小学館
- 日本国語大辞典刊行会 (編) (1976): 日本国語大辞典 第20巻 小学館
- 大久保弘行 (1972): 万葉集-永遠なるものの創造 夢 國文学 解釈と教材の研究, 17: 6, 109-115
- 大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編) (1974): 岩波古語辞典 岩波書店
- 大槻文彦 (1982): 新編大言海 雷山房
- 岡田重精 (1982): 古代の斎忌-日本人の基層信仰- 国書刊行会
- 長田夏樹 (1979): 邪馬台国の言語 學生社
- 西郷信綱 (1972): 古代人と夢 平凡社
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 (校注) (1965): 日本古典文学大系68 日本書紀 下 岩波書店
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 (校注) (1967): 日本古典文学大系67 日本書紀 上 岩波書店
- 佐々木信綱 (編) (1955): 新訂 新訓 万葉集 下巻 岩波書店
- 末永 晃 (1991): インドネシア語辞典 大学書林
- 高木市之助・五味智英・大野 晋 (校注) (1962): 日本古典文学大系7 萬葉集 4 岩波書店
- 東條 操 (編) (1951): 全国方言辞典 東京堂
- 安本美典 (1987): 日本語の古層を統計的にさぐる 言語, 16: 7, 70-84
- 福田昆之 (編) (1987): 満州語文語辞典 FLL
- 塙保己一・塙 忠宝・塙 忠昭 (編纂) (1883): 續群書類従 巻第404 和歌部39 日本紀竟宴和歌 (續群書類従完成會, 1931, 續群書類従 第15輯上 和歌部, 48-73)
- 原田正春・大野 徹 (1979): ビルマ語辞典 社団法人 日本ビルマ文化協会発行
- 犬養 廉 (校注) (1982): 新潮日本古典集成 蜻蛉日記 新潮社
- 片桐洋一 (編) (1982): 勉誠社文庫111 永青文庫蔵 伝一条兼良筆本 伊勢物語 勉誠社
- 國民圖書株式會者 (編纂) (1927): 校註 日本古典文学大系 第24巻 懐風藻・凌雲集・文華秀麗集・經國集・本朝續文粹 國民圖書株式會社
- 小松 格 (1980): ウズベク語辞典 泰流社
- 倉野憲司・武田祐吉 (校注) (1958): 龍田風神祭 (日本古典文学大系1 古事記・祝詞, 岩波書店, 400-405)
- 松村博司 (校注) (1964): 大鏡 岩波文庫
- 松村博司・山中 裕 (校注) (1964): 日本古典文学大系75 梅沢本 榮花物語 上 岩波書店
- 松下大二郎・渡邊文雄 (編纂) (1951): 寛永版 萬葉集 (国歌大観歌集, 697-815, 角川書店)
- 中嶋幹起 (1994): 現代廣東語辞典 大学書林
- 野口忠司 (1992): シンハラ語辞典 大学書林
- 尾上八郎 (校注) (1927): 嘉禄本 古今和歌集 岩波文庫
- 大江千里 (894): 句題和歌 (續群書類従完成會, 1931, 群書類従 第11輯 和歌部, 452-458)
- 小沢重雄 (編著) (1983): 現代モンゴル語辞典 大学書林
- 坂本恭章 (1988): カンボジア語辞典 大学書林
- 佐藤義人 (1980): ウルドゥー語常用6000語 大学書林
- 新谷忠彦 (1981): ラテ語-ベトナム語-日本語 語彙 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所発行
- 新谷忠彦・揚 昭 (1990): 海南島門語 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所発行
- 小学館・金星出版社 (編) (1993): 朝鮮語辞典 小学館
- 高木一之助・五味智英・大野 晋 (校注) (1957・1959・1960・1962): 日本古典文学大系4・5・6・7 萬葉集1・2・3・4 岩波書店
- 竹内和夫 (1987): トルコ語辞典 大学書林
- 竹内与之助 (1988): 字喃字典 大学書林
- 玉井幸助 (校註) (1954): 健壽御前日記 朝日新聞社
- 鳥羽季義 (1980): ネパール語基礎1500語 大学書林
- 富田竹二郎 (1987): タイ日辞典 養徳社
- 渡壁三男 (編) (Cantero, P. 一部監修) (1983): Mahsen en Pohnpei Kawehwehda ni Lokaian Sapahn. (ミクロネシア連邦主島ボナベ島 ボナベ語入門) 河北印刷
- 財団法人日本古典文学会 (編纂) (1978): 日本古典文学影印叢刊2 建久2年俊成本 古今和歌集 貴重本刊行会
- 財団法人日本古典文学会 (編纂) (1978): 義孝集 (日本古典文学影印叢刊9 榊原本私家集 (一), 貴重本刊行会, 7-47)
- 財団法人日本古典文学界 (編纂) (1978): 来迎院本 日本靈

参考文献

- 秋元吉郎 (校注) (1958): 日本古典文学大系2 風土記 岩波書店
- 勉誠社 (発行) (1977): 勉誠社文庫69 影印 神宮文庫蔵村井敬義奉納本 讀校典侍日記
- 勉誠社 (発行) (1982): 勉誠社文庫107 影印 細川家永青文庫蔵 大和物語
- 勉誠社 (発行) (1986): 勉誠社文庫132 影印 宮内庁書陵部蔵 和泉式部日記
- Buddahadatta, A. P (1969): Pali-English Dictionary. New York: Saphrograph Corp.
- Burrow, T. & Emeneau, M. B. (1961): A Dravidian Etymological Dictionary. London: Oxford University Press.
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (編) (1994): 中国語大辞典 角川書店
- 土井久弥 (編) (1975): ヒンディー語小辞典 大学書林
- Echols, J. M. & Shadily, H. (1975): An English-Indonesian Dictionary. Ithaca and London: Cornell University Press.

名 島 潤 慈

異記 (日本古典文学影印叢刊1 日本靈異記・古事談抄, 貴重本刊行会, 7-194)